日曜日は恋する魔女

立原えりか

TOKIMEKI
BUNKO

収録作品について

「恋する魔女」　フォアレディーズシリーズ（1966.刊）新書館

ISBN4-591-03162-4
N.D.C. 913

日曜日は恋する魔女　ポプラ社文庫　T2

1988年8月　第1刷

作　立原えりか（たちはら）
絵　宇野亜喜良（うのあきら）
発行者　田中治夫
編集　井澤みよ子

印刷所　瞬報社写真印刷株式会社
製本所　大和製本株式会社

発行所　東京都新宿区百貨町5
〒160 振替東京4-149271
株式会社　ポプラ社
電話(営業)03-978-0051　(編集)03-357-2216

© 立原えりか　宇野亜喜良　1988年　落丁本・乱丁本はお取りかえします。

日曜日は恋する魔女

TOKIMEKI BUNKO 2

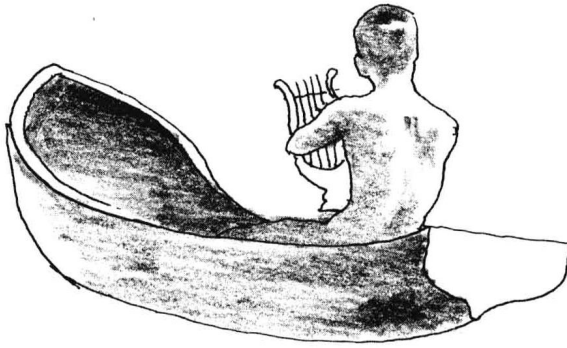
もくじ

わたしのオルフェ　5
ことわざはお好き？　47
日曜日よ　さようなら　91
趣味は殺人　141
魔女クラブ　199
あとがき　233

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

❖作家・**立原えりか**（たちはらえりか）
1937年、東京に生まれる「人形のくつ」で児童文学者協会新人賞を受賞。作品に、「いちばん優しい花」「恋のしずく」「木馬がのった白い船」「立原えりか童話集」「ガラスの花たば」など、創作、詩、翻訳とはばひろく活躍中。

❖画家・**宇野亜喜良**（うのあきら）
1934年、愛知に生まれる。作品に「あのこ」「ねこの王さま」など、創作絵本、雑誌イラスト、さし絵、装丁デザイン、広告などで活躍。



わたしのオルフェ

1

七月の美しい日暮れだった。村をとりまいている山々の峰は、金色とばら色に燃えあがって、うす青の空には、星があわく光っていた。

「きいてほしいことがあるんだ」

と、彼がいった。

わたしたちはならんで、やわらかい草の上にすわっていた。そこは、村のひとたちが、〝ゆめの天国〟と名づけている、草におおわれたくぼ地だった。ところどころに白樺の木が立ち、草むらには野ぶどうが、みどりの宝石のような実をかくしている。夏のおわりには、くぼ地いっぱいに、うすゆき草が咲いた。

「なに……？」

声がふるえているのがわかった。知っているのよ、といいたかったのだ。わたしはもう三年も、そのときを待っていたのだもの。彼がはっきりと、彼の言葉で、それをいってくれるときを。

三年前の夏、わたしは彼に会った。わすれもしない、この草原で。わたしは十八

だった。くぼ地は、しずみかける陽の光で、金色にかがやいていた。彼の目のなかにも、金の太陽があふれて、まっすぐに、わたしを見つめていた。
「つのぶえ荘は、どちらでしょうか」
彼がきいた。背が高くて、ひたいがひろく、髪の毛がくしゃくしゃだったのをおぼえている。
「この道をまっすぐにいって、湖の向こう岸です」
こたえながら立ち上がるわたしを、彼は、なれた手つきで助け起こしてくれた。
「どのくらいかかります？」
「二十分ほどです。ご案内しましょうか、わたしも帰りますから」
高原にある村は、七月でも、夕がたの風がつめたい。わたしは、陽のかげりぐあいから、つのぶえ荘へもどる時間がきていることを知っていた。
「それはありがたい。ぼくは初めてなので、この村のことはなにも知らないのです」
「わたしも、二日前にきたばかりですわ」
「そうですか。ぼくはまた、どこかの別荘へ、いらしてるのだと思いましたよ」
彼の声は低くて、夕暮れのなかでよくひびいた。

くぼ地を出て、森のなかを、ならんで歩きながら、わたしは、知ったばかりの村についておしゃべりした。

この村はたくさんの別荘でできあがっているようなものだった。すずしくて、しずかで、美しい。森の道は、ときどき、細く左右にわかれていて、道のほとりの木に、小径のかなたにある家の持ち主の名が記してある。けれども、森のなかでひとに会うことはまれだった。ことに、村でたった一軒のホテルであるつのぶえ荘に泊まっているわたしなど、小径の果てにどんな家があり、どんなひとたちがいるのかも、知らない。

つのぶえ荘は、森を出て、〝青いなみだ〟とよばれる湖をまわった、向こう岸にある、古くて、小さなホテルだった。別荘を持つほどのお金も、夏のあいだずっと、村にいられるほどの時間もないひとが、つのぶえ荘に泊まる。わたしは、二週間の夏休みと、この滞在のためにかせぎ貯めたお金を持って、村へきたのだった。

「ひとりでいらしたのですか？」

「ええ」

わたしがこたえると、彼は、ふしぎそうな顔をしてみせた。

「めずらしいですね。ここはしずかすぎる。わかいひとが出かけてくるようなところ

ではないでしょう」
「そうらしいですわ。でも、しずかすぎるところが、気にいったわ」
「毎日、なにをしているんですか」
彼は、まるで父親みたいだった。
「なんにも。ぼんやりして、ぶらぶら散歩して、それだけだわ」
「よくたいくつしませんね」
「たいくつしたら、帰ろうと思います。でも、歩きまわるのは好きですし、すこし遠出して牧場へいけば、馬にも乗れますわ」
わたしは、東京で、どんなにいそがしい日を送っているか、つのぶえ荘での暮らしが、どんなに気の休まるものかを、彼に話した。彼はどんなことでも、ちゃんときいてくれた。たとえばわたしのデザインした、子供用スリッパの図案についても、汽車のなかで読んだヒッチコックのスリラー、わたしを乗せて走る、牧場の馬についてでも……。
三日のあいだ、話し相手がいなかったわたしは、湖へつくまでのおしゃべりで、すっかり楽しくなっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「さあ、つきました。これが、青いなみだ。つのぶえ荘は、あれよ」
湖の上には、ほのかな夕もやがながれて、風が、木々をゆすっていた。
それはほんとうに、ひとつぶのなみだにそっくりのかたちをした湖なのだ。水は澄みとおって、いつも氷のようにつめたい。対岸には、また森があって、つのぶえ荘の赤い屋根だけが、おもちゃのように見える。
「もっと、小さな湖かと思った。これでは向こう岸までいきつくのにずいぶん時間がかかる」
彼は、岸に立ってタバコに火をつけながら、あたりを見まわしていた。
「でも静かだ。こんなところへくれば、気分が休まるね、たしかに」
「お気にいって？」
「ああ。ちょっとさびしすぎるようだがね」
「歩いて、青いなみだをまわりましょうか。それとも、舟に乗ります？　わたしたち、運が良いわ。こちら側に、舟がきてますもの」
「舟があるの？」
わたしは走っていって、岸辺のハンの木につないである小舟のともづなを解いた。

つのぶえ荘では、青いなみだの岸に一そうだけ、小舟を用意してある。古い小舟で、白塗りのペンキはとっくにはげて、オールのかわりに木の枝が二本そえられていた。ホテルのひとたちは湖をわたるとき、気まぐれに、この舟をつかう。だから、乗りたいと思っても、向こう岸にあれば、歩いて湖をまわらなければならないというわけだ。

「助かるな。こんな荷物だし、舟をこぐのは大好きなんだ」

彼は、うれしそうにわらって、まず、革のスーツケースを小舟にのせ、わたしが乗るまで、ともをおさえていた。

「気をつけて、水はつめたそうだ。あなたがおぼれても、助けてあげられないかもしれないからね。ぼくは泳げないので」

彼は、いかにも心配そうにわたしを見まもり、それから、みがるに乗りこんだ。

むかいあって、彼がオールをあやつるのを見ているのは、ふしぎな感じだった。わたしはそれまで、いちどだって、男のひととふたりで、舟に乗ったことなどない。彼はすばらしい漕ぎ手で、水しぶきでわたしをぬらすこともなく、小舟は矢のようにすすんだ。

「早いのね。ボートの選手みたいよ」

「そうだよ。昔は選手だったこともあるんだ」

わたしたちは、だれもいない湖にこだまする、ふたつの笑い声をきいた。そのとき、わたしは、彼の目を、美しいと思った。だれかを好きになるということは、そんな小さなできごとからはじまるのだろうか。草むらのなかにいたわたしを彼が見つけ、わたしが、彼の目を美しいと思った、たったそれだけのことから。

その日から、わたしは彼を、わすれることがなかった。けれども、わたしたちは、古風な暖炉があるつのぶえ荘のロビーで、べつべつのテーブルについてお茶をのみ、表情がわからないほどはなれて、いすにもたれていた。わたしがさそえば、彼は散歩にも、乗馬にも、ついてきてくれた。わたしたちが、ならんで歩いているところは、父親と娘のようだった。彼はわたしより、十六も年上だったのだ。

彼のことを知るには時間がかかった。年齢と、翻訳という職業を知っただけで、その年の夏休みは終わってしまった。

つぎの年の夏まで、なんと長い一年だったことか。町を歩きながら、彼ににたうしろすがたに、なんど胸をときめかせたろうか。町にはひとがあふれているのに、たったひとり、わたしのさがしているひとだけが見つからなかったのだ。

わたしは、一年のあいだに、ひどくおとなびて、黒い服が好きになった。
二度めの夏も、おなじだった。彼の声は、森や湖にこころよくひびき、動作はおちついていてやさしかった。たったいちどだけ、彼はわたしのほおにキスした。小舟に乗って、青いなみだをわたっていくとき、彼が水をはねとばしたのだ。
「ごめんごめん。腕がにぶったね」
彼はあわてて、水をかぶったわたしに、ハンカチをわたそうとした。
「いいの」
わたしは首をふって、まじまじと彼を見つめた。まる一年のあいだおもいつづけ、そして出会った顔が、目のまえにあった。
「キスして。キスでふいて」
熱でもだしたように、わたしはふるえていた。目をひらくことができなかった。彼のくちびるは、鳥の胸毛のようにそっと、わたしのほおをかすめただけで、小舟はとまりもしなかったのだ。
「おかしな子だねえ、きみは」
彼はわらっていた。わたしのほおを、ひとすじ、あたたかいものがつたわって、小

舟にこぼれた。
あのとき、彼にはわかったにちがいない。わたしの心が。そのくせ、彼は東京で会おうとはいわなかった。
「来年、また会えるかな。ここで」
そうつぶやいただけだった。
三度おとずれた夏、わたしはもう、村の景色の美しさにも、つのぶえ荘のしずかなたたずまいにも、魅力を感じなかった。彼に会うためにだけ、ここへきたのだ。一年にたったの二週間。でも、彼に、わたしの心がわからないはずがあるだろうか。
ゆめの天国への散歩は、彼がさきに、口にしたのだった。わたしたちは、おたがいの息づかいがきこえるほどまぢかにすわって、彼が、
「きいてほしいことがある」
といったのだ。
わたしはだまって、彼を見つめていた。彼は見なれた、いつもの彼だった。
「お願いといいかえたほうがいいかな」
ほほえんでいる。わたしが、こんなに待っているのに。彼は、わたしを好きだと、

いってくれるはずだった。そうにちがいなかったのだ。
「あした、ぼくの友だちがくる」
「え？」
わたしの待ちこがれていた言葉ではなかった。わたしは、ひとりで見つづけていた夢からさめ、ぼんやりとくぼ地を見まわした。星がやわらかいしずくをこぼしている。
「ぼくの許嫁だ。ぼくたちは、この村で結婚するつもりだ」
いいなずけ、と彼がいった。古めかしい、やさしい言葉で。わたしはその意味を、はっきりと悟るまで、ひどく時間がかかった。
「びっくりしたのかね。いろんな事情があって、ふたりとも年をとってしまった」
「……」
だまりこくっているわたしを見おろして、彼はおだやかにつづける。
「白い村には、教会があるね。ぼくたちはあそこで、式をあげる。そこできみに、彼女のつきそいになってほしい。あのひとにはそんなに親しいことをたのめる女友だちがいないのだ。ぼくたちのささやかな式のために、はるばるきてくれるようなひともいない。きみがひきうけてくれたら、彼女はきっとよろこぶと思うし、ぼくにとって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton